

♪ C.M.v. ウェーバー (1786-1826) ♪

歌劇「魔弾の射手」序曲

ウェーバーの代表作「魔弾の射手」は、ドイツ・ロマン派歌劇最初の成功作として知られる。物語はドイツの古い伝説に基づき、恋人と結婚するためには射撃競技に勝たなければならない狩人マックスが、悪魔に魂を売って手に入れた魔法の弾を使ってしまい、その不正が露見し追放を命じられるというもの。オペラ全曲中、有名な「狩人の合唱」となっていて広く親しまれているこの序曲は、序奏付のソナタ形式により、劇中の音楽を配しながら物語全体を集約する形で展開する。4本のホルンによって奏でられる序奏部の主題は、「秋の夜半」として特に広く知られている。

歌劇「オベロン」序曲

ウェーバーの最後のオペラとなった「オベロン」は、ロンドンのコヴェントガーデンからの依頼で作曲された当時流行の魔法劇。妖精の王オベロンとその妃ティターニアの口論に始まる荒唐無稽な物語だが、この序曲はその変化に富んだ内容をドラマティックにまとめた一曲として愛好されている。魔法の角笛を表すホルンの印象的な調べが気分を盛り上げ、アレグロ・コン・フォーコの主部では心沸き立つような主題や優美な旋律など、変化に富んだ展開となる。

♪ F. メンデルスゾーン (1809-1847) ♪

ヴァイオリン協奏曲 ホ短調 Op.64

ベートーヴェン、ブラームスの作品と並ぶ「三大ヴァイオリン協奏曲」の一曲として名高いこの

作品は、1844年、メンデルスゾーン35歳の時に作曲された。この年メンデルスゾーンは、ベートーヴェンの〈ヴァイオリン協奏曲〉の初演以来38年ぶりの再演を指揮して、その真価を世に知らしめたが、まさに生まれるべくして生まれたといえるのがこの名作である。ロマン的な情感と古典的な形式美がすぐれたプロポーションのもとに融合し、また、華麗なテクニックをちりばめた独奏パートの魅力にかけても完璧なまでの冴えを見せるこの協奏曲は、メンデルスゾーンが常任指揮者の任にあったライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団のコンサートマスター、フェルディナント・ダヴィドの協力を得て完成され、彼に献呈された。曲は全3楽章からなるが、各楽章は切れ目なく続けて演奏されるよう指示されている。これは、各楽章の流動性を中断させないための配慮であり、メンデルスゾーンは他にも、当時はまだ奏者に任されることが一般的だったカデンツァをすべて作曲するなど、作品の細部にまで完璧さを求めている。

第1楽章：アレグロ・モルト・アッパッシオナート(ソナタ形式)。

第2楽章：アンダンテ。

第3楽章：アレグレット・ノン・トロppo(序奏) —アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ(主部)。

♪ R. ワーグナー (1813-1883) ♪

楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」 第1幕への前奏曲

劇と音楽を完全に融合させ、「楽劇」という新しいスタイルを創り上げたワーグナーの作品のほとんどは、神話や伝説の神秘的な世界を描いたものだが、楽劇〈ニュルンベルクのマイスタージンガー〉は、そんなワーグナー唯一の